

## 第5章 多民族国家の発展性

### 1, 強い大学・自由と移民の支え

アメリカが強い第3の要因は移民が支える大学の強さである。アメリカが第二次大戦で獲得した最大の成果は、優れた人材の獲得である。大勢のユダヤ人がナチの殺戮を恐れてアメリカに移住し、本人や子弟がアメリカの学問、映画、音楽の水準を世界一に高めた。ノーベル賞全受賞者のうちユダヤ人は20%を占めており、その大部分はアメリカで研究を続けた。アインシュタインが最も有名である。

経済学では、サミュエルソン、フリードマン、レオンチェフ、クルーグマン、クズネツツ、モジリアーニなど、世界の経済学をリードした人達が、アメリカの大学に集まった。

ユダヤ人の学者は、学問から宗教を隔離することに成功した。自由主義経済学の学者は、宗教に全く触れずに、政府が干渉しない経済は、混合経済より効率性が高いことを証明した。フリードマンはその典型である。自由が重要であることを宗教的・哲学的ではなく、数学的・経済学的に主張した。経済学ノーベル賞の半数はユダヤ人である。

マルクスやハイエクのような壮大な哲学的体系と一体になった経済学は敬遠された。それは宗教の分野に入り込んでいるからだ。大学ではユダヤ教を始め、優秀な異教徒を教授に迎え、イデオロギーに関わるような解決不能な問題を避け、客観的に証明可能な分野で研究を深めた。

儒教、ヒンズー教、イスラム教等の信仰を持った学者でも、ユダヤ・キリスト教の学者と平等な立場で経済理論を論争できる。世界中から優れた頭脳がアメリカの経済学会に集まり、経済学者の名士録に選ばれている約1000人中で外国人は60%を越し、世界最高の経済学が生まれた。しかし、普通の敬虔なアメリカ人は、経済学をほとんど評価しない。それは、単に高級な論理を展開したに過ぎず、宗教感や倫理感にかけているからだ。経済学者が努力して、克服した宗教の影響を排除した理論的世界が嫌われた。

経済学以外の分野でも、アメリカの庶民は学問をあまり尊敬しない。またアメリカの大統領や政治家は、自己の経歴について、ベトナム等の戦場で戦ったことを強調するが、学歴についてはほとんど触れない。彼らは、立派な人間を育てるのは、学問ではなく、宗教だと信じている。

オバマ大統領は、ケニアの留学生と白人との混血であって、ハワイやインドネシアで育ったことを強調するが、見事な学歴については触れようとしない。アメリカの大学は世界の学問の中心であるが、庶民は学問よりも、信仰心の深さや逆境を克服した努力に関心がある。学問ではなく、家庭で宗教や道徳や努力をしっかりと躰けられた人物を敬愛する。

アメリカは、リーマンショックや中東戦争で、世界の信用を失った。しかし、アメリカの大学は学問的レベルが高く、実力さえあれば、人種に関係なく、教授のポストを獲得できる。またどの国でも、アメリカの大学に留学すれば箔が付き、帰国後、就職する時に有

利である。1954～1955年には、アメリカへの外国人留学生は3万人に過ぎなかったが、1994～1995年では45万人に、2012～13年では82万人に増えた。うち中国人が24万人、インド人が10万人、韓国人が7万人、日本人は2万人である。

彼らの一部はアメリカで成功し、シリコンバレーにおける先端技術の開発は中国人、インド人の研究者に支えられ、両国人のベンチャー企業が最も多い。彼らの多くは、経済成長した母国に帰っても、実力がつき、友人の輪が国際的に広がっているので、政府や企業の重要なポストに就いている。

中国共産党の幹部の子弟の大部分はアメリカに留学している。それは、実力を磨き国際性を身につけるためだけではない。親の賄賂収入を保管し、親が失脚した時の安全な逃亡先を確保し、アメリカの自由主義制度を利用して一族を守ることができる。習近平の一人娘は、ハーバード大学に4年間留学した。中国とアメリカは、地下で深く結びついている。

## 2, 人種のるつぼから色つき人種サラダへ

アメリカでは、19世紀まで、WASPはエリート層を独占し、神から与えられた二つの大洋を支配する使命を達成しようと心掛け、アメリカは、広大な領土と豊富な資源と自由の3要素が多く民族を引きつけた。19世紀終わりには、イタリア人、アイルランド人、ドイツ人等のカトリック教徒が増え、さらに、ギリシャ人、ユダヤ人等、東方正教徒やユダヤ教徒が移民し、アメリカ人はヨーロッパ人の混合民族に変わった。彼らは、WASPが支配している世界に合わせて、WASPに似た行動・習慣に従い、またWASPらしい名前に変える者も少なくなかったという。ドイツ人の多くはWASP化した。

しかし、20世紀になると、次第に出身民族を主張するようになり、カトリック教徒はカトリックの大統領を実現する運動を始め、それまで目立たないように生きていたユダヤ人は、社会の正面に躍り出た。

ニクソン政権の時に縦横に活躍し、中国との国交を実現したキッシンジャーはドイツから、彼に続いて外交で名をあげたブレジンスキーはポーランドから、それぞれ亡命してきたユダヤ人である。アイルランド出身のカトリック信者・ケネディは、遂に大統領になった。人種のるつぼだったアメリカは、人種のサラダにか変わった。

19世紀の終わりになると、サラダの中身に多様なカラーが付いた。黒人は公民権を認められて正式なアメリカ人になり、メキシコやアジアの移民が激増した。2010年には、アメリカの人口3億人の内、白人（非ヒスパニック系）63%、ヒスパニック系16%、黒人12%、アジア系5%となり、ヨーロッパ系白人は、半分に近づいた。

それぞれの民族は、選挙における集票力を高め、アメリカ政府が母国を援助するよう政治力を発揮している。ブレジンスキーによれば（「孤独な帝国・アメリカ」朝日新聞社）、ポーランド系アメリカ人は、第二次大戦中、アメリカ政府に働きかけて、スターリンのポーランド侵攻を承認させなかった。またクリントン大統領は、NATOの中央ヨーロッパ

進出計画を支持して、アメリカ中央・北部のポーランド系の票を集めた。

外交の分野では、ユダヤ系が最も大きな影響を与えている。5～6百万人のユダヤ人が、学会、マスコミ、娯楽産業で支配的な役割を占め、平均的なアメリカ人より高学歴ではるかに豊かである。彼らは膨大な資金を投入して、国際石油資本より強力なロビー活動を展開し、アメリカ政府に親イスラエル政策を継続させている。

アメリカでは、ユダヤの他、メキシコ、ギリシャ、アルメニア、イラン、韓国、インド等、民族ごとのロビー活動が活発であり、相反する要求が増えており、外交や移民政策に大きな影響を与えた。しかし、アメリカは、覇権国としての地位を守るために、原則として、国連・WTO・IMF等の国際機関を通じて行動し、またグローバリゼーションという器を利用して、冷戦後の世界で民主主義国のリーダーとして行動するように心掛け、国論の分裂を避けてきた。

しかし、2001年の同時多発テロ事件から、アメリカは変わった。ブッシュ大統領は世界を善悪二つの国に分け、アメリカ側に立たない国は全て民主主義の敵だと決めつけ、テロとの戦いを神から与えられた使命であると宣言した。

民主主義国では、国会が大統領と巨大な官僚機構をチェックし、必要な時には、反対するはずである。ところが、イラク戦争の時、イラクにおける軍事行動は大統領の自由裁量に任された。アメリカの権威は取り返しがつかないほど失われ、ユダヤ人と石油資本のロビー活動が国益を損なった。

### 3, 文化共存の可能性

アメリカで、最もアメリカらしいところは、カリフォルニアといわれている。カリフォルニアは、もともとメキシコ領であり、メキシコとは長い国境で接しているから、合法、非合法の移民が絶えない。また太平洋に開かれ、19世紀には、金鉱山開発、鉄道建設、農場開発のため、アジアから貧しい労働者が押し寄せた。そこは多民族が集団を形成して生活している開放的な土地である。

カリフォルニアの人口構成（2012年）は、白人（非ヒスパニック系）40%、ヒスパニック系38%、アジア系13%であり、ロサンゼルスでは、白人（非ヒスパニック系）29%、ヒスパニック系48%である。白人は多民族の一種に過ぎなくなった。ヨーロッパ出身の白人がほとんどゼロの地域が少なくない。

カリフォルニアは、多文化化した国家の縮図といえる。アメリカには決められた国語がない。今や、ロサンゼルスでテレビやラジオを十分楽しむには、英語とスペイン語が必要であるという。30年前には、英語を話せなければ生活できなかったが、現在では、英語が絶対に必要なわけではない。多言語の案内所や公的報告書がつくられ、スペイン語を教える小学校が増えたからだ。

米ソの冷戦中、カリフォルニアには、フェーズ・エアクラフト、ロッキード、TRW等、

軍需産業が栄え、冷戦後は、軍事費が縮小して、経済危機を迎えたが、多民族の文化が混合している強さが発揮された。アップルの創業者・スティーブ・ジョブズは、シリア人の学者とアメリカ人の女子学生の間生まれ、オレゴン州の大学を半年で退学し、アルバイトで生活費を稼ぎ、ヒッピー生活を送り、ヒッピー仲間とシリコンバレーで企業を起こした。

優秀なアジアの頭脳が、スタンフォード大学に集まり、その近くにあるシリコンバレーでは、起業の60%近くが中国人とインド人であり、両国人のベンチャーキャピタルが活躍している。アメリカでノーベル賞受賞者が最も多い州は、カリフォルニア州である。

多くの中国人は中国の習慣と伝統をそのまま持ち込んでおり、中国以外の民族は、漢字だけの看板や春節祭の爆竹に悩まされる。韓国人も遠慮なく、看板にハングル文字を使う。中・印・韓の民族には、高学歴で裕福な暮らしを送っている人が少なくない。

これに対して、黒人やヒスパニックの多くは、単純な低賃金労働に従事して、社会の底辺を支え、子供の教育費を支出できないので、子供も単純労働に付くという循環を繰り返している。多文化地域では、多様な民族文化の交差が改革のエネルギーを生み出すと同時に、民族間の文化対立や貧富の大きな格差という宿命的な問題を抱えている。国内で2つの民族や2つの宗教・宗派が対立し、それぞれの人口が拮抗している時は、内戦が止まらず、破綻国家になりやすい。

カリフォルニアには、プロテスタント、カトリック、儒教、ヒンズー教など、宗教や宗派が多数存在し、それらが緩衝剤の機能を果たし、大きな対立にはならない。ヒスパニックや黒人の教育水準の向上に成功すれば、21世紀の新しい文明が生まれるだろう。

カリフォルニアはアメリカでは最大の経済規模の州であり、GDPに直すと、カナダ、韓国、インドを抜き、世界9位である。人口はカナダを抜き、ポーランドとほぼ同じである。ヒスパニックの移民は増加傾向を続け、カトリック教徒が多く出生率が高い。20年後には、人口は、現在（2010年）の3700万人から5000万人近くに達すると思われる。カリフォルニアがアメリカ変革の先頭を切り、中国と対抗できる力を生み出しそうな気がする。

次は、儒教と中国経済、  
その次は、イスラム教と経済です。